

欧米における日本文学研究

—報

告—

松 尾 靖 秋

すでに昨年のことになったが、私は「欧米における日本文学研究並びに日本語教育の実情調査」という目的で、本学より海外出張を命ぜられ、8月中旬出発して10月下旬帰国した。順路は、香港・ニューデリーを経由してまずモスクワに入り、以後北ヨーロッパから南ヨーロッパにかけて一巡し、イギリスに渡り、更にアメリカを経由して帰国するという、前後70日間の出張であった。文字通りのかけあるきであったために、私の得た結果にも若干の過誤があるかもしれないし、その調査にも皮相な、また繁簡宜しきを得ないもののあることを充分認めてはいるが、とにかく論文というのではなく、レポートという意味で、ここに拙文を草しておこうと思う。なお本稿は、本来ならば昨年度の「研究論叢」に発表すべきものであったが、時間的にその余裕がなかったために、やや時宜を得ないものとなったということ、また、ここ1年の間に、学内新聞その他に執筆し、特に雑誌「国文学」の7・8両月号には、やや具体的なことについて既に発表してあるということ、そのために、本稿のある部分にはそれらとの重複もあり、やや二番煎じの趣もないではないということ、そうしたことについて、あらかじめ諸賢の御諒恕を得ておきたいと思う。

出発前、文部省の資料によって調査したところによると、日本文学あるいは日本語の講座をもつ大学の数是非常に多いことがわかったが、まずその概観から始めることとする。

1. ア メ リ カ

(1) 専門的研究を行なっているもの。

(イ) ハーバード大学 Harvard Yenching Institute (燕京研究所)

East Asian Research Center (東アジア研究センター)

(ロ) コロンビア大学 East Asian Institute (東アジア研究所)

(ハ) ミシガン大学 Center of Japanese Studies (日本研究センター)

(ニ) カリフォルニア大学 ロスアンゼルスキャンパス・パークレーキャンパス

Center of Japanese Studies (日本研究センター)

- (ホ) ワシントン大学(シアトル) Far Eastern and Russian Institute (極東ロシア研究所)
- (ヘ) エール大学 Institute of Far Eastern Languages (極東語研究所)
- (ト) スタンフォード大学 日本研究センター (国際キリスト教大学内)
- (チ) ハワイ大学 日本研究科 (大学院課程) East West Center (東西センター)
- (2) 一般教育として日本語の講座を設けているもの。
 - (イ) ニューヨーク大学 日本文学・美術・政治・仏教・儒教・神道その他。
 - (ロ) シラキュース大学 社会学の一部として講義。
 - (ハ) コーネル大学 東洋学の一部として講義。
 - (ニ) フロリダ州立大学
 - (ホ) ジョージタウン大学 日本語コース (初・中・上級)
 - (ヘ) マイアミ大学
 - (ト) ミネソタ大学 日本語・支那学コース
 - (チ) ノースウェスタン大学 日本史
 - (リ) オハイオ州立大学 日本学
 - (ヌ) ペンシルバニア大学 日本史
 - (ル) 南カリフォルニア大学 日本の政治
 - (ヲ) ユタ大学

その他は割愛するが、ほかにも、アリゾナ・シカゴ・クレアモント・コロラド・カ
ンサス・プリンストンなどでも、何らかの形で日本語の講座を設けている。

2. イギリス

- (イ) ロンドン大学 極東言語文化学部日本語日本文化学科、日本語日本文学講座、
歴史学部極東歴史学科、日本歴史学講座
- (ロ) ケンブリッジ大学 東洋学部日本学科、日本学講座
日本学部 (Institute of Oriental Studies—東洋学研究所内)
- (ハ) オックスフォード大学 東洋学部極東学科
- (ニ) ホルボーン大学

3. フランス

- (イ) 国立現代東洋語学校(L'École Nationales des Langues Orientales Vivantes)

- (ロ) ソルボンヌ大学 文学部、日本語、日本文化講座
大学附属日本研究所 (L'Institut d'Étude Japonaises)
- (ハ) 高等研究学院 (L'École Pratique des Hautes Études)
- (ニ) ルーブル学院 (L'École du Louvre)
- (ホ) リヨン国立大学 文学部日本文化学科
- (ヘ) リヨン・カトリック大学 神学部東洋文化学科、東洋学講座

4. 西 ド イ ツ

- (イ) ハンブルク大学 哲学部日本語日本文化学科
- (ロ) ゲッティンゲン大学
Sinologisches Seminar (中国学研究所)
- (ハ) マルブルク大学 哲学部インド東アジア学科、支那日本学コース
- (ニ) ゲーテ大学 哲学部東アジア言語、文化学科、東アジア言語、文化学講座
- (ホ) エルランゲン大学 哲学部
- (ヘ) ミュンヘン大学 哲学部日本学科
- (ト) ガルス・カトリック大学神学部
- (チ) ハイデルベルク大学 美術史研究所 (Kunst-Historisches Institut)
東洋学研究所 (Orientalisches Seminar)
- (リ) ボン大学 哲学部日本学科
- (ス) 西ベルリン大学 哲学部日本学科

5. ソヴィエト連邦

- (イ) レニングラード大学 東洋学部
- (ロ) モスクワ大学 東洋学部日本語科
- (ハ) モスクワ東洋語学院
その他略

6. ヨーロッパ諸国

- ベルギー ブラッセル自由大学日本語講座、外国語学院日本語科
- ノールウェー オスロー学生協会日本語講習会
- オランダ ライデン大学文学部日本語講座
- デンマーク コペンハーゲン大学日本語講座

イタリアー 中亜極東協会、ナポリ外語学校

スイス ベルリッツ語学校

ポーランド ワルソー大学東洋学部日本語科

チェコスロバキア チャールス大学文学部日本語専修科、夜間制度学校日本語科

ハンガリー エドボン・ローランド大学日本語講座

ユーゴスラビア リュブリアナ市日本語講座

ほかにも、インドネシア・マレーシアをはじめ東南アジア諸国の大学や更にオーストラリアやカナダ、中南米の諸大学についてみても、数多の大学が日本語の講座を有していることを知り得た。ともかく90校に垂んとする大学その他で日本文学ないしは日本語の講義が行なわれているということは、数の上では必ずしも多いとはいえないかもしれないが、私には少々驚きであった。ヨーロッパやアメリカで、最近、日本に対する関心がたかまり、日本文学や日本語を含めて、日本文化の研究が盛になりつつあることは、かねて耳にしていたが、日本語のような、いわば特殊な、しかも外国人にとっては学習の極めて困難な言語が、これほど盛に研究され学習されているということは、思いもかけないところであった。私はこれらの中から約20校を選んだのであるが、日程や時間の都合で結果的には次の15の大学を訪問することを得たにすぎなかった。

モスクワ大学(ソ連)、ストックホルム大学(スウェーデン)、コペンハーゲン大学(デンマーク)、ハンブルク大学(西ドイツ)、ルール大学(同)、ボン大学(同)、ハイデルベルク大学(同)、ウイン大学(オーストリア)、パリ大学(フランス)、ロンドン大学(イギリス)、ケンブリッジ大学(同)、コロンビア大学(アメリカ)、ハーバード大学(同)、カリフォルニア大学(同)、ハワイ大学(同)等である。ただし、この中でストックホルム大学とルール大学とは、文部省の資料にもなく、現地ではじめて知り得た大学であるが、特に後者は新設の大学でありながらまことに見るべきものがあつた。また、これらの大学の中でも、休暇中であつたり、時間の関係などで、比較的詳細に知り得たのは、わずかに12の大学にすぎないという結果となつてしまつたが、その内容について、その印象について、旅程に従つて述べてゆくこととする。

1 モスクワ大学

いわゆるモスクワ大学(総合大学)は、モスクワの郊外レーニン丘にある壮大な大学で、夜間学部を含めて学生数は5万を算するといわれるが、文学部の方は市内にあって、赤の広場から徒歩約10分ほどのマルクス街18番地、大通りに面して建てられて

いる。黄色く塗った瀟洒な建築で、約百年前のものであるという。通称を東洋語大学というが、正式には“Institut Wostocknik Yazikow, Kafedura Yaponsukoi filologie”(東洋語学研究所日本語学部)という。正式に文学部所属となったのは1956年のことだそうである。ここのN.G. Ivanenko 女史は、日本でも有名だが、休暇で旅行中であったため、代って、現代日本語の研究者で言語学者でもある I.W. Gorovnin 氏に面会、大学の内容について知ることを得た。

ここでは歴史・文学・言語の各分野について教えるが、基本はあくまで日本語と日本文学の教育にあり、就学期間は6カ年で、はじめの2年間は専ら日本語の習得にあてられ、そのうち1年間は実習的な教育が行なわれるという。あと4年間で文学作品についての講義をきくことになる。講義には、古事記・万葉・源氏はもとより、枕草子・徒然草・平家等、また西鶴・芭蕉に至るまで、多彩な講義が用意されている。イワネンコ女史は文学史・古事記・万葉など古典についての講義を担当しておられる。啄木の研究者として日本でも知名のマルコワ教授は一昨年退任されたとのことであった。現在、日本語・日本文学担当の教員は17人で、学生数は約50名、日本語学と日本文学を半数ずつで、1年、2年は各8名というから、上級は2、3名というクラスもあり、近年次第に多くなりつつあることがわかる。それにしてもこうした少数の学生で、徹底した教育が行なわれていることはうらやましい限りである。日本語の授業は毎日2～3時間あり、しかも入学の競争率は6倍で、かなり選ばれた学生が入っているの、その成果にも見るべきものがあるようである。卒業生の就職は極めてよく、殆どが研究機関や、ラジオ・通信その他マスコミ関係、ツーリスト方面に入るとのことである。ただ近年、女子学生が次第に多くなり、その就職にはやや困難があるとのことであったが、いずれも同じというべきであろう。おもしろいのは、廊下の一隅に金モールで飾った写真が5,6枚掲示してあり、きいてみると、今年の卒業生中の優等生であるという。その写真でも女子がやはり半数を占めていたのでも、その大勢は推測できる。休暇中で図書館の職員不在のため、蔵書を見ることができなかったのは残念であったが、岩波の古典大系はもとより、漱石や藤村の全集など、基本的なものはまず揃っていて、学生の勉学・研究には支障はなさそうである。

ソ連における日本文学、日本語の研究は、かなり古い歴史をもち、わが国の作品で、ロシア語訳されたものは非常に多い。本学の今井義雄氏の好意によって、その若干を左に記してみることとする。

- ① 伊勢物語—古代日本の詩的物語 (エヌ・コンラッド訳、1921年)
- ② 狂言—日本の中世の茶番 (ヴェ・ログーノヴァ訳、モスクワ東洋文学出版所、

1953年)

- ③ 竹取物語—9世紀の日本の物語 (ア・ホロドヴィッチ訳、モスクワ、1935年)
- ④ 古い歌集から一万葉集 (アー・イー・グルスキナ訳、モスクワ、1956年)
- ⑤ 18世紀の日本の名歌集より—新古今集と百人一首 (ア・グルスキナ訳、モスクワ、1935年)
- ⑥ 古事記 (ゲー・オー・モンガレル訳、レニングラード、1927年)
- ⑦ 古事記 (エヌ・フェリドマン訳、レニングラード、1927年)
- ⑧ 古代日本の祭礼詩—ノリト (モスクワ、1935年)
- ⑨ 紫式部—源氏物語より(夕顔その他) (エヌ・コンラッド訳、レニングラード、1924年、モスクワ、1935年)
- ⑩ 大和物語 (イエー・エム・コルパクチ訳、レニングラード、1927年)
- ⑪ すももの香りの中で—芭蕉俳句 (モスクワ、1954年)
- ⑪ 奥の細道 (エヌ・フェリドマン訳、モスクワ、1935年)
- ⑫ 露の転り—蕪村句集 (ヴェー・マルコヴァ訳、モスクワ、1954年)
- ⑫ 石工の響き—句選 (ヴェー・マルコヴァ訳、モスクワ、1956年) これには、晝台・言水・丈草・其角・惟然・一茶その他が含まれている。

その他は省略に従うが、近代・現代のものとなると、ロシア語訳は圧倒的に多く、枚挙するにいとまのない位である。芥川の「羅生門」(エヌ・フェリドマン訳、1936年)や「河童」(1962年、1966年新版)をはじめとして、正岡子規・独歩・有島・山本有三・啄木・蘆花・菊池寛・石川達三・窪川稲子・宮本百合子・藤森成吉・中野重治・野間宏・阿部知二・堀田善衛その他、適宜とりあげてみてもまことに多彩な顔ぶれである。更に日本民話の翻訳も1918年から1958年にかけて19種が翻訳されているという具合で、彼等の日本文学に対する深い関心のほどを示すものといつてよいであろう。

2 コペンハーゲン大学

コペンハーゲン大学は市の中心部にあって、構内もさほど広くなく、環境にも恵まれているとはいえないが、自動車が附近をあまり通らないせいか、通行人の少いせいか、静かなことは不思議なくらいである。しかも1478年の創立だというだけあって、校舎の前にずらりと並んでいる胸像は、歴代の学長のものであろうか、歴史の古さを物語るようで、なかなかの壮観である。重厚な建物の中央入口から中に入ると、中はしっとりとした静かな世界である。左手に事務室があって、休暇中だが事務関係の人

がいたのできいてみると、やはり教授との面会は不可能であったが、図書館のみは開かれているとのことであったので、その見学をすることにしたが、現在行なわれている講義の概略についても知る事ができた。

日本文学は Dr. Søren Egerod 教授が中心となり、アシスタントとして Koji Takeuchi, Chon-Tao-Wen, Kristina Lindell などの諸氏がおられる。講義は Treaffar På Østasiatisk Institut で行なわれるとのことである。日本文学というよりも日本語の教育が中心のようで、しかも規模も大きくはないように見受けられた。

教室のある建物と隣合せの図書館の建物は、ちょうど百年前のものだという。その歴史は大学の創立とともに古く、およそ 500 年に及ぶといい、ここでは図書館の方が興味深いものがある。たとえば 1650 年からの新聞が全部揃えられ、製本されて配架されているのは壮観であった。図書館の図書構成は人文科学のみで、約 40 万冊を蔵する。日本文学関係のものは必ずしも多いとはいえないが、関連したものにも若干珍しいものがあるので記してみると、新編いろは字典・新撰明治事典・日本書紀通釈（飯田武卿）・サンスクリット教典・銭流書千字文・縮刷康熙字典・広益中字典・いろは引漢語字典・普通字林五編（後藤常太郎、明治 38 年）等があり、また、

Shinran, Kurata Hyakuzo, Glean W. Shaw, June 1912 Hokuseido Press

Tales from Old Japanese Dramas by Asataro Miyamori, Knickerbocker press
1915 など、

その他

Asr Grammaticae JAPONICAE LINGUAEE, Rome, MDC XXXII 1632,

SUPERIORUM PERMISSU LE LIVRE CANONIQUE DE L'ANTIQUITÉ
Japonaise, LÉON DE ROSNY, PARIS 1887

Elements of Japanese Grammar for the Use of Beginner, Minister Prempolentationary in Japan, Shanghai 1861

というような稀覯文献もある。この図書館は、図書費が年間 40,000 クローネ（約 210 万円）、製本費が 30,000 クローネ（約 156 万円）ということだから、さして多くはないが、政府から毎年相当数の図書をギフトとして受入れているというから、蔵書の構成の上にはさして支障がないもののようであり、7 人の教授が図書館の専任で、事務職員は 25 名で一切をまかなっているということであった。

3 ハンブルク大学

ハンブルク大学は、学部によって所在地を異にする。訪ねたのは哲学部で、東洋学

もその中に含まれている。古い建物と新しい建物とが巧みに調和するように建てられていて、アカデミックな風格をそなえ、美しい大学である。研究所は14階建て、入口にその案内標示があり、7階が東洋学の研究室で、標示には

Seminar für Sprache und Kultur Chinas, Seminar für Sprache und Kultur Japans,

と見える。7階に上ると研究室と演習室とが磨き上げた廊下をはさんで両側にずらりと並んでいる。休暇中であったが、ちょうど在室されていた西谷裕作氏に会い、大学の内部について聞くことができた。同氏は客員教授として京都大学から出向され、2年間の講義予定だとのことであった。

ハンブルク大学の学生数は約17,000人で、うち6,300人が哲学部、そのうちの3,000人が男子、3,300人が女子である。文科系で女子が次第に増加している現象は、あなたがち日本の大学ばかりではない。日本学に関する講義には次のようなものがある。

Der japanische Zen-Meister Dōgen Benl

Lektüre von Texten aus der Muromachi-Zeit Benl

Lektüre moderner japanischen Essays Benl

Probleme der buddhistischen Philosophie Sasaki

Geschichte des japanischen Buddhismus Sasaki

Neue und alte japanische Lesung von Kambun Wenck

Lektüre von Glossentexten Wenck

Lektüre aus Erzählungssammlungen des 12. Jahrhunderts Wenck

Einführung in die japanische Umgangssprache (II) Dombrady

Lecture von Haibun Dombrady

Konversation für Anfänger Nishitani

Konversation für Fortgeschrittene Nishitani

Zeitungslektüre Nishitani

以上によってもわかるように、この大学の日本学は、他に比べてかなり充実したものであると思われる。道元や、俳文、漢文のような特殊な講義を持つ大学は珍らしいといってよい。日本学の中心である O. Benl 教授は、「源氏物語」のドイツ語訳を完成した人物として知られている。その他、上記したように G. Wenck 教授や G.S. Dombrady 博士、その他、京大の西谷氏、及び大谷大学の佐々木氏がスタッフとなっている。

このように日本学にはかなり力を入れていることが知られるが、そのことはまた日本の文献の蒐集ぶりにも伺われる。研究室附属の図書室では、日本学の予算が年額40,000マルク(約400万円)というから相当な額で、日本での新刊行物はすべて購入してあまりあると思われるし、実際に蔵書を見ると、外国人の日本研究書や、翻訳書も非常に多いので、その手広い集書ぶりが知られる。私の小著のようなものまで入っていたのには、正直のところ少々驚きであった。蔵書のいくつかを記してみると、日本古典大系(岩波)はもとよりのこと、日本文学大系(筑摩書房)、大漠和辞典、日本随筆大成、国歌大系、短歌シリーズ(春秋社)など叢書類はまず殆ど揃っていて不自由はない。「貞徳の研究」(正統2巻、小高敏郎)のような、現在入手の比較的困難なものまで架蔵されているという具合であった。ともかくドイツにおける日本学の盛んな大学の一つといえよう。

4 ルール大学

ルール大学(Ruhr)の名は日本ではあまり知られていなかった、ということは、当然といえば当然である。1965年に建設にかかった、いわば新設の大学だからである。しかしわが国の新設大学の概念とは全くかけはなれたもので、その規模の雄大さと、その意欲的な建設ぶりには、特に目をみはらされるものがあつた。ここには順天堂大学からオリエンタル言語学の村山七郎教授が客員教授として来ておられて(昨年10月帰国)つぶさに大学の内容を知ることを得た。

ルール大学はデュッセルドルフから汽車でちょうど1時間の距離にあるボーフム(Bochum)市の郊外にある。ここは例のオペルの壮大な自動車工場のある町で、戦前はルール炭田の中心、石炭の町として有名であったが、いまでは石炭の町としてのおもかげは殆ど見受けられない、実に清潔な町である。市中ではセントラル・ヒーティングの配管工事なども行なわれているといった、近代都市としての性格をもつ落ち着いたドイツの地方都市の一つと考えてよい。いま建築を終った大学の建物は9階のものが3棟あり、大学事務・研究室・教室などにあてられている。最新の設備をもち、教室の彩光や防音など、素人目にも心にくい限りであった。建築学的にも独創的な、異色のもののようで、その建設に関する大部の文献“Die Universität Bochum, Gesamtplanung”が1965年に出版されていることでもそれは推察にかたくない。更に驚かされたのは、この建物と同じサイズのものが現在5棟同時に着工され、それぞれその工事の大半を終っているということである。日本の大学に見られるように、一棟の工事が終わってから更に一棟というような方法ではなく、一挙に造ってしまうというやり

方である。また現在は、ボーフム市内から大学まで、バスで狭い田舎道を走って40分ほどもかかるが、大学正門前から市内に向って4車線の道路が建設中で、これが出来ると、市内から約10分で達することができるということであった。丘あり谷あり、森林あり、その敷地の広大なことは、現在の教職員用駐車場のほかに、一万余台を収容する学生用駐車場をつくる計画があるということからも想像されよう。東西3.5キロ、南北4キロに達する校地があてられ、いうまでもなく州立（国立）の総合大学である。この大学は計画によれば、ドイツにおける東洋学・日本学のセンターとなるとのことで、その母胎としての東洋研究所“Ostasien-Institut”は、現在は市の中心部にあり、レビン教授（Prof. B. Lewin）が中心となって、文献の蒐集や施設の拡充にあたっておられる。ドイツの大学の意欲的な面が、このルール大学にとくに象徴されているといってもよい。レビン教授は、芭蕉その他の翻訳で日本でも知られているミュンヘン大学のハンミッチ教授（Prof. H. Hammitzsche）の門下で、その関係でハンミッチ教授も最近この大学に移ってこられているし、また、一昨年早大の稲垣研究室に留学した C. Fischer 氏が助手として勤務している。レビン教授は、「続日本紀」や「六国史」の翻訳もあるように、上代文学が専門で、ドイツにおける日本学の中心的存在であり、この大学の創立とともに、ミュンスター大学から移ってこられた方である。同教授によると、現在の蔵書は研究所創立のとき、さしむき10万マルク（邦価900～1,000万円）で集書にかかり、その後充実して現在に至ったとのことである。一見したところ基礎的な註釈書がやや少ないが、ごく最近の研究書まで殆どのが揃っているから、研究にはさしむき不自由はあるまいと思われる。日本古典大系、江戸時代翻刻資料、国語国文学講座（三省堂）、故事類苑、広文庫、江戸叢書、大漢和辞典というようなものから、「蜀山人の研究」（玉林晴郎）のような特殊なものまで架蔵されている。近々ベルリン大学の日本研究所の蔵書がすべてここに移されるとのことであるから、今後の充実ぶりに期待してよいと思われる。次に講義題目について記すと、次のごとくである。

まず入門的な学科としては、

Japanische Umgangssprache II Kishitani

Lectüre leichter japanischer Texte Kishitani

Konversations- und Übersetungsübungen Kishitani

Einführung in die japanische Schriftsprache Lewin

など、口語、文法などの初歩や翻訳練習のようなものがあり、専門的なものとしては、

Die japanische Dichtung Lewin

松 尾 靖 秋

Seminar: Das Manyôshû Lewin

Kurs: Lektüre leichter Klassischer japanischer Texte Brüll

Novellen von Kunikida Doppo Kishitani

などが用意されている。更に美学、歴史、演劇関係学科では次のようなものがある。

Die Begriffsbildung in der japanischen Ästhetik Hammitzsch

Zeile und Wertung der japanischen Geschichtsschreibung privater Hand

Hammitzsch

Seminar: Texte zur japanischen Ästhetik Hammitzsch/Brüll

Jagd und Fischerei in Japan Naumann

Übungen zu den Karikotobaki Naumann

Grundtypen des japanischen Theaters Hammitzsch/Brüll

Seminar: Texte aus der privaten Geschichtsschreibung Japans

Hammitzsch/Kemper

講義担当者中 Kishitani とあるのは、広島大学から客員として出向されている岸谷敞子氏のことである。

なお、この研究所には現在の日本学・支那学・朝鮮学のほかに、一兩年後に中央アジア部が予定されており、また、東洋地理・東洋経済・法律などの学科も増されとのことである。しかも日本学専攻の学生は20名だというから、まことに贅である。

ともかく、種々の意味で、ルール大学には見るべきものが多いといえよう。

5 ボン大学

ボン大学は市の中心部からやや離れて、ライン河畔にある。その校舎は昔のエレクトラ宮で、広大な芝生が前面にひらけ、校舎の端から端までは約500メートルあるという。外観も内部の装飾もやはり宮廷風なしつらえがしてあって、落ち着いた雰囲気である。余談になるが、私の訪問した大学で、驚き、感心し、かつ羨しく思ったのは、どの大学もすべて、その構内にも廊下の壁にも、立看板一つなく、ビラー一枚貼っていないことであった。規模の大小、伝統の有無、それぞれ相違はあるにしても、一步構内に入り、建物の中に入ると、そこは清潔で静けさのみちみちた世界であった。本当の学問の府というものを、どの大学でも痛感したことである。それに比べて、日本の大学が何と雑然とし騒然としていることか。

ボン大学の全学生数は約14,000名で、日本文学専攻の学生は約30名である。一万人

をこす学生といっても、非常に多くの専攻に分かれるのと、専攻それぞれの学生は少数で、教育も徹底して行なえるわけで、日本の大学の学生数の多いことはどうも異常のようである。

講義の内容を見ると、次のようなものがあるが、すべてを取り上げ得ないのでここでも主なものの若干を記しておくこととする。

Japanisch für Anfänger II Zachert

Japanische Umgangssprache Zachert

Japanische Zeitungslektüre Zachert

Nihon-gaishi Zachert

Taketori-monogatari Zachert

Manyôshû Zachert

Übungen zu Japanisch für Anfänger II Yamanaka

Übungen zur japanischen Umgangssprache III Yamanaka

Übungen für Fortgeschrittene Yamanaka

Japanischer Arbeitskreis Yamanaka

これを見ても、他の大学に比べてやや手不足の感もしないではないが、ツアヘルト教授には一昨年、近代文学の研究のために、早大に留学した Rudolf Stoot 氏のような有能な門下もあるので、逐次充実した講義が用意されると思われる。

ツアヘルト教授は、いうまでもなく中心的存在であるが、蔵書にも同教授の意向が反映していて、その種類の豊富さと、数量とは日本の新設大学の国文科の蔵書など及ぶもつかないほどである。「俳諧三十六歌僊」(寛政11年)、「蕪村集」(文政戊子9月刊)、「和蘭字彙」(上・中・下、安政乙卯)、「東海道名所記」(6冊完本)というような、板本類のかなり多いのも特色である。

図書館は大きくはないが、瀟洒な近代建築で、その閲覧室は、大きなガラス窓越しにライン河が正面に見えるような所にある。大小さまざまな船が悠々と上り下りするのが見えて、あきることがない。ここにある日本関係の蔵書は約75,000で、すべて地下の書庫に収蔵されている。

ボン大学は戦前から日本でもなじみ深い大学であるが、ともかくその雰囲気の魅力である点は、他にあまり類がないといえよう。

6 ウイン大学

ウイン大学は、市の中心部にあって、昨年600年祭を迎えたというから、非常に古

い伝統を有することが知られる。古い堂々とした宮殿風の石造の校舎と、道路をはさんでうしろに鉄筋コンクリートの新校舎がそびえている。東洋学関係の研究室と教室とはこの新しい方にある。ここはもちろん総合大学であるから、学生総数は全学部にわたって約15,000名であるが、日本文学・日本語を聴講している学生は15~20名ほどで、更に日本学を専門とする者は毎年数名にすぎないとのことであった。ここでもやはり、マスプロ教育に馴れたわれわれの感覚からすれば、驚きの方が先に立つというのが正直のところであった。諸外国からの留学生もかなりあり、中でも中近東諸国からのものが多いという。

この大学における日本学研究のあり方は、これまでのドイツの諸大学における方法とはいくらか異って、日本学というのは、文学・歴史・言語の各方面にわたって総合的に日本に関する研究を行なうのであって、その意味では、民族学・文化学・地理学などすべてのものを含めて日本学の範疇に入れているようである。従って時代も日本の古代から現代までをすべて対象としていることがわかる。例えば助手の Josef Kreiner 博士は、現在来日中で、福井県の「宮座の研究」に従事中であり、その成果が講師資格取得のための論文にまとめられる予定だそうである。また、Dieter Jettmer 氏は、太平洋沿岸方言の研究、開拓村の調査などをされ、女性の Ruth Fischer 氏は啄木に関する心理学的研究をされ、前都立大学講師で、オーストリアに滞在中であった金子エリカ氏はこの大学で Alexander Slawik 教授について研究され、八重山の民族学的研究を専門とされている。こうしたことによっても、ウイン大学の学風というか、性格を推察することができると思う。各分野の共同研究による日本学とでもいったら適当かもしれない。従って研究室には、下駄や蓑、のぼり、神社の守札といったような、いわば雑多な民俗資料、われわれも見ることがないようなものまでが、実に多数、丹念に蒐集されているのである。

この大学の日本学(Japanologie)はかなり古い歴史をもっている。前記スラビック教授によれば、次のごとくである。

まず、1848年、August Pfizmaier 教授によって、Japanologie と銘打って、言語と文化に関する研究が、中国についてのそれとともに開始され、1900年に至って基礎が固められた。1935年、Wilhelm Schmidt 教授、Oka 教授、及び Takaharu Mitsui 男爵等が中心となって、一層の充実を見たが、1938年、前記三井男爵が、約 4,500冊の日本関係の文献をあつめて、名実ともに研究所としての体制が整い、1945年に至って正式にウイン大学の研究機関の一つとして “Institut für Japankunde” の名称が与えられた。戦後は民族学研究所の中に統合されたが、1954年に至って、Slawik 教

授が中心となり、民族学研究所から日本学部の独立をみたというのがその概要である。

次に現在の講義題目についてふれると、次のようなものがある。

Ausgewählte Kapitel aus der Frühgeschichte Japans, Prof. Slawik

Die altjapanische Literatur als sprachliche und kulturwissenschaftliche Quelle,

Prof. Slawik

Japanologisches Praktikum I, II, Prof. Slawik

Japanologisches Seminar, Prof. Slawik

Einführung in die japanische Literatur, Lehrbeauftragter Mayeda

更に、Sprachliche Ausbildung として、

Japanisch I (Grundkurs, Fortsetzung)

II (Fortbildungskurs)

III (Lektüre moderner Autoren), Lehrbeauftragter Mayeda

Japanisch I, II, Instr. Dr. Kreiner

など、言語教育を主とした学科も同意されている。

日本学関係の蔵書は約11,000冊あり、興味あるものを取りあげると、徳川実記、群書類従(正・続)、宣長全集、日本文学大系、日本古典全書、福沢諭吉全集、嬉遊笑覧、白石全集、篤胤全集、古今要覧稿、俚言集覧その他がある。一見したところでは民俗学的な資料や文献がかなりの分量を占めていることは当然で、特色となっていることがわかる。また大正年間の雑誌「主婦の友」や「文芸クラブ」、「日の出」などのような大衆雑誌までも集められ整理されている。朝日新聞縮刷版もバックナンバーが揃っているのも珍らしく思われた。年間図書予算は15,000～20,000シリング(約20万円～27万円)とのことであるから、決して多くはないが、日本学だけであれば、一応間にあうのであろう。Slawik 教授も西ドイツの大学に比べて、オーストリアの大学はあらゆる面で貧しく、教員の待遇も西ドイツの方が格段恵まれていて羨しい限りだ、といっておられたが、私は他人事として聞きのがすわけにはゆかなかったのである。

また、この研究室で、特に興味をひいたのはスライドの検索兼映写装置であった。ドイツ製であるが、中央が映写面で両側にスライド原板5,000枚を収蔵できるようになっている。必要に応じて迅速にフィルムが取り出せるようになっていて、視覚教育にはまことに効果的な装置であることが痛感されたのである。

7 パリ大学

パリ大学では、まず附属の国立現代東洋語学校 “École Nationale des Langues

Orientales Vivantes” について述べる必要がある。同校は市の中心からやや離れたところ、シテ島に近く閑静なセーヌ河畔にある。外観は古色蒼然といった、古めかしい建物であるが、中に入るとそれがかえってしっとりとした、おちついた雰囲気をもたしていることが感じられる。名称の通り、語学を主とした学校である。「東洋語」とはいうものの、これは学校創立時代の初期の名称で、現在では、アジア、アフリカ、東洋、東ヨーロッパなど60カ国語の講座を有するまでに至っている。最近教室の狹隘のため、分散して授業が行なわれているとのことである。日本語もその一講座となっているわけで、3年制から成り、17歳で入学する。聞くところによると、一年入学の時には200人に及ぶことがあるが、卒業の時には5、6人になってしまうとのことである。日本語の学習の困難さと、その訓練のきびしさを物語っている。ここを卒業するとソルボンヌ大学文学部への進学がひらかれている。試みに学科編成について記すと次のごとくである。

Grammaire élémentaire de la langue parlée (Kôgo), Professeur René Sieffert

Exercices de thème et de rédaction, Maître-assistant Jean-Jacques Origas

Exercices de version, Assistant A. Mori

Écriture et conversation, Assistant B. Fujimori

Grammaire de la langue parlée, compléments, Répétiteur M. Kanno

Explication de textes modernes, Maître-assistant Origas

Thème et rédaction, Prof. R. Sieffert

Lecture et version, Assist. A. Mori

Lecture et conversation, Assist. B. Fujimori

Grammaire de la langue littéraire (Bungo) et explication de textes littéraires, classiques et modernes, Répétiteur Yamada

Thème, rédaction et lecture de textes modernes, Prof. R. Sieffert

Exercices de langue littéraire, Assist. A. Mori

Lecture et conversation, Assist. B. Fujimori

この講義一覧を見ても分るように、Sieffert 教授が中心で、Origas 氏や森有正氏、藤森文吉氏その他がスタッフになっているが、他にも Francine Hérial 女史や荒木氏というような方も加わってなかなか多彩であることを附記しておく。旧制の東京女高師国文科出身の藤森氏夫人が、附属図書館の司書をしておられるので、その蔵書をつぶさに見ることを得たが、同氏によると、現在の蔵書は約5万冊で、年額30,000フラン(約200万円)の予算が当てられているとのことである。非常に豊富な蔵書で、例え

ば任意にとりあげてみても、前賢故実・延喜式などから、近世文芸叢書・燕石十種・大日本古文書・玉葉・故事類苑・黙阿弥全集・群書類従・宣長全集・近代日本文学大系・南紀徳川史・西鶴全集(中央公論社)、日本古典大系その他叢書類や基礎的なものが空間を埋めつくすといってもよいほど収蔵されているのは壮観である。また「平安朝伝来の白氏文集と三蹟の研究」(小林茂美)や「日本説話文学索引」のような特殊なものまでも架蔵されていて、まず研究にはいささかの支障もない。文学関係の雑誌も多いが、京太の『国語・国文』の全揃が写真複製されて蔵されているのにはやや驚かされたことである。

次にソルボンヌ大学文学部には附属の日本学研究所“L'Institut d'études Japonaises”がある。設立は1959年で、その目的とするところは、フランスにおける日本学を統轄すること、その発展に寄与すること、その資料を集めること、更にフランス国内や外国における東洋学研究所や東洋学者と連絡を緊密にすること、及び日本の研究機関や学界と連絡をとること、などであり、日本各地に関する出版物を広く普及させることをその使命とする。所長はアグノエル教授(Prof. Haguenouer)で、さきの森・藤森両氏が補佐しておられる。アグノエル氏は日本学ばかりでなく、朝鮮語・朝鮮文化の研究家として著名である。ソルボンヌ大学はさすがにその伝統を誇っているように、その内庭にはリシュリウー僧正が1692年、私費を投じて建てたという祈念堂を背景に、パストゥール(右)とユーゴー(左)の像が並び立ち、アカデミックな雰囲気でもことに魅力的である。やはりフランスにおける日本学の中心といってよい。

8 ロンドン大学

ロンドン大学は、周知のように市の中心部にある。ケンブリッジ大学とは異なり、大学をとりかこむ環境は必ずしもすぐれているとはいえないが、ロンドンそのものが東京のように雑踏した町ではないので、騒々しさはなく、構内はやはり静かである。私の訪ねたのは、“School of Oriental and African Studies”の附属図書館で、大学の総合校舎からちょっと離れたところにあり、表はさして広くないが、中に入ると見かけによらず豊富な蔵書をもっている。ここはモリソン(Robert Morrison)が1824年中国から持ち帰った15,500部の中国書を中心に、極東地域の書物が集められたので、現在も中国書は圧倒的に多いが、日本関係の文献も約35,000部に達するといひ、充実した集書ぶりで、基礎的なものは殆んど網羅されている。私のノートにも多数の書籍がメモしてあるが、その中から若干をとりだしてみると、俳句講座(明治書院)・子規全集・俳書大系・日本歌謡集成・俳文学大系・国歌大系・江戸叢書・古今要覧稿・古

事類苑・近世文芸叢書・群書解題・隨筆大成・日本隨筆全集・日本古典大系(岩波)・桂宮本叢書・古典文庫・帝国文庫・評釈江戸文芸叢書・群書類従・黙阿弥全集・謡曲大観・読史総覧・読史備要・南紀徳川史・日本外交文書・近世風俗志・本居宣長全集・二宮尊徳全集・日本儒林叢書・賀茂真淵全集・東京市史稿・図訳漢文大成・漢籍国字解というようなものはすべて揃っているし、東大史料編纂所刊行のものは、大日本史料・大日本古文書・大日本近世史料・大日本古記録その他すべて揃っていてなかなか壮観である。国史大系・史籍集覧・大久保利通文書などもある。仏教関係も、チベット大蔵経や、大正新修大蔵経なども全巻揃が蔵されている。単行書では津田左右吉氏の「文学に現はれたる我が国民思想の研究」の元版4冊があったが、ヨーロッパの諸大学では見ることのできないものであった。雑誌類も、例えば「中央公論」は大正3年以降はすべて製本されて保存され、「文芸春秋」や「一橋論叢」なども見える。年間予算は1,200~1,300ポンド(邦価約130万円)だというから、目ぼしい新刊書は殆んど購入できるようである。最後に一つ貴重な資料についてふれておきたい。「昭和八年における社会運動の状況」(内務省警保局刊)というもので、9年、10年刊のものもあり、見開きのところに蔽秘と朱印が捺され、限定版で通し番号が打ってある。大使館事務官の名前が記入されていたが、終戦後図書館に入ったものであるという。大杉栄の事件に関する記事もあるとのことであったが、左翼取締のきびしかった時代の貴重な資料というべきもので、日本では焼却処分にあったかもしれないし、あるかどうかを知らないが、その方面の研究家には垂涎のものであろうと思われる。

次に講義の内容について記しておくこととする。

まず、Beginners として、

Structure of the spoken language

Speech work and composition

Characters and character texts

Language Laboratory work

Outlines of the History of the Far East

Speech work and remanized texts

次に Second Year として、

History of Japanese literature

Modern Japanese reading

Discussion class (in Japanese)

Language Laboratory work

Composition and translation

Far Eastern Buddhism

Development of the Japanese Script

Introduction to classical Literary Style

Sintoo and Confucianism

次に Third Year としては、

Courses for Optional Papers

Specified earlier texts

Modern Japanese readings (including special texts)

Discussion class (in Japanese)

Language Laboratory work

Introduction to soosyo writing

最後に Final Year として、

Course for Optional Papers

Composition and translation

Modern Japanese reading (including special texts)

Discussion class (in Japanese)

Language Laboratory work

というような学科配当となっている。そして学科のそれぞれには1週間に何時間を充てるかが細かく規定されている。一見してわかることは、会話と文章表現が重視されているということである。しかも3年次には草書に関する講義まで用意されているのを見ると、全課程を終了するころには、かなり高度な理解力を身につけることができると思われる。他の大学のカリキュラムとちがって、ここでは学科の一つ一つに担当者があててないが、スタッフとしては、Professor としては F.D. Daniels 氏がおられ、Reader には C.J. Dunn 氏、Senior Lecturer としては S. Yamada 氏 Lecturer として P.G. O'Neill, A. Owada, K.L.C. Strong, S. Weinstein, I. Yamada などの諸氏がおられる。Daniels 教授によれば、日本語・日本文学専攻の学生は十数名だとのことであるが、こうした多数のスタッフによって鍛練されるということは、まことに贅沢なことである。最近の学期試験に用いられた修士課程の問題を見せられたが、なかなかどうして、日本の大学では文学部国文科の最上級、あるいは同じく大学院修士課程の学生に出題されるものと全く同じ程度といってよく、非常に高度のものであることを知り得た。

ついで乍ら、Daniels 氏によれば、英国では文部省の所管は高校以下についてであって、このロンドン大学のような国立大学に対しては、文部省はその経理・運営については一切干渉しないとのことであった。大蔵省の関係部署に “University Grants Committee (略称 U. G. C.)” というのがあって、ロンドン大学ではその全予算の90%をここから支出されているのであって、英国ではすべて “Help but no control” が建前であるという。ただし最近では Control の傾向が次第に強くなる傾向にあるのも事実だということであった。

いま一つ、ロンドンでふれておかなければならないものに大英博物館がある。1753年の建設になり、館員は1,200人、図書館だけでも500人に及ぶという。蔵書数は約800万冊で、最近完成した蔵書目録は1,000冊に達するというから、その歴大な規模を想像することができる。東洋部長 Kenneth B. Gardner 氏の話を中心にして、以下その内容について述べてみたい。なお、この大英博物館及びケンブリッジ大学所蔵の木版本については、コロンビア大学の Richard Lane 氏が、かつて「英国における元祿文学」(西鶴研究、昭28、第6巻所収)及び、“Saikaku’s Prose Works” (MONUMENTA NIPPONICA 1958, VOL. XIV NOS. 1~2) において報告されているのでなるべく重複をさけたいが、Gardner 氏に見せられたものでも、西鶴関係では、好色五人女(初版)、日本永代蔵(貞享5年版)、世間胸算用(元祿12年版)、西鶴織留(再版)、桜陰比事(元祿2年版)というような、日本でもあまり手にすることのできないものがあり、嵯峨本三十六歌僊、同伊勢物語、おさな源氏、一休諸国咄、若草原氏物語、住吉物語、長明発心集などもある。また「慶長癸丑仲秋黄門光広」と奥書のある「烏丸本つれづれ草」も手にして見ることを得た。更に日本には存しないとされている近松の「他力本願記」の原本と翻刻とを見るを得た。翻刻は先年、早大の鳥越文蔵氏とロンドン大学の C. J. Dunn 氏の共編によって古典文庫より刊行されたものである。「江戸時代文芸資料」はいまや稀覯本となっていて、大変な高値をよんでいるが、Gardner 氏の書棚にはその覆刻本が架蔵されている。日本の国文学関係者の垂涎してやまない有名なキリシタン版「平家物語」は最貴重図書として特別の所に保管されている。題して、“NIFFONNO COTOBATO Historia uo narai xiran to FOSSVRV-FITO NO TAMENI XEVA NI YAVA RAGVETARV FEIQENO MONO-GATARI” とある。この中には平家と「金句集」「イソホ」などが収められていて1592年版である。室町末期文祿元年にあたり、国語音韻学で問題とされている、H音がF音であったということが、この題名にも示されていて興味深いものがある。また

「農業朝日」(朝日新聞社)のような、特殊な雑誌のバックナンバーも目にとまった。緑色のすばらしい革装幀である。わが国で戦後間もなくのころの雑誌はワラ半紙のような極めて紙質の悪いもので、このような豪華な装幀はもったいないが、とはGardner氏の言であった。しかしこのような重厚な装幀をして惜しまないところにも、英国人気質がのぞいているようだ。もともとここに蔵されている貴重な板本類は、アーネスト・サトウ(薩道)のコレクションが基礎をなしているのであるから、その豊富さは尤ものことである。ケンブリッジのアストン文庫とともに雙壁をなすものといってよい。日本関係の年間図書費は2,000ポンド(約200万円)とのことであるから、ここでも日本で刊行される新刊書はすべて集められているといっても過言ではあるまい。Gardner氏が最近購入された、市川才手の追善集、享保15年刊の「父の恩」というのがあった。東京の美術倶楽部の売立で手に入れられた五、六点の中の一冊だが、価格は60ポンド(約6万円)であったという。われわれから見てもこうした特殊と思われるものに、大金を投ずるのであるから、驚かざるを得ない。意欲的な集書ぶりの一端がここにも見られるといってよからう。

これまでヨーロッパの各大学で、教授諸氏に会って、はじめて分ったことであるが、われわれが忙しさのあまり、折角届けられた出版案内や古書通信に目を通すこともなく、机上に置きざりにしている間に、彼等は航空便で届いたそれらにいちはやく目を通し、どしどし発注しているというのが実情である。油断のならないことを改めて思いかえたことである。

9 ケンブリッジ大学

ケンブリッジ大学のことについては知る人も多いと思うが、ロンドンから汽車で約1時間半のところにある、人口約10万のこじんまりした町にある大学である。大学の建物が数多く散在しており、構内があまりにも広いので、町そのものが大学であるような感じをうける。ケム川が流れ、緑の芝生と、鬱蒼と茂る樹立が所々に見える広大な構内に、28のカレッジが配置されているのである。環境のよさは、私の見た限りでは、他に類がない。重厚な数々の建物は、いずれも古色蒼然としていて、おちついた雰囲気である。カレッジとは、いうまでもなく学寮と訳されるもので、それぞれ教会を中心にそれをかこむように建てられている。最も古いものは13世紀末のピーターハウス・カレッジで最も新しいのが先年建てられたチャーチル・カレッジである。ここで学生は、教員の中から出ているチューターと寝食を共にして、研究と人間形成とにはげむのである。Kings Colledgeが最も大きい、16世紀創立のTrinity Colledge

はベーコンやテニスン、ニュートンなどの卒業したカレッジで、ここに入る学生はその後輩だというわけで、非常な誇りを持っているという。これらの偉人たちの大理石像が中庭にずらりと並んでいるさまは、羨しい限りであり、壮観ですらある。17世紀初の建築である Kings Colledge のチャペルにはルーベンスの大作があった。卒業生中のある有力者が2万ポンド（約2,000万円）で買いとって寄贈したものだという。カレッジでは1人の学生に対して書斎と寝室との2室が与えられるしくみになっている。尤も最近では学生総数も1万名に達するので、すべての学生がこうした恵まれた生活をするわけではなく、これは下級生に限っていて、上級生は学外の下宿住まいをするようになったとのことである。それにしても日本の学生に比べれば全く縁遠い話であらう。

中央図書館は堂々とした建物で、大英博物館のほかにはちょっと類がないように見受けられる。学生は入口でガウンを着て入るようになっている。蔵書数は200万冊で、日本文学関係の蔵書も、これまで見てきた大学の中では最多のように見受けられた。もともとアストン文庫を基礎として集められただけあって、板本の類も大英博物館のそれに匹敵するといつてよい。その詳細については先にもふれたようにコロンビア大学の Lane 教授の報告（「西鶴研究」第6輯）に詳しいが、ちょっと取り出してみても、「奥羽観蹟聞老誌」や「和漢三才図会」「日本風俗図会」といったようなものが出てくる。少しばかり記してみると、秋声全集、水上瀧太郎全集、黙阿弥全集、大近松全集、謡曲大観、俳書大系、能楽全書、逍遙選集、源氏大成、芭蕉全集（角川版）、西落本大成、室町時代物語集、現代小説全集、漱石全集（元版）、同決定版、源氏物語事典、樗牛全集、中島敦全集、武者小路実篤全集、真山青果全集など、また「源氏物語新釈」（吉沢義則）や「平家物語の研究」（佐々木八郎）というように、全集、叢書の類から個人の著書まで、まず無いものはないといつてよい。試みに俳諧のところを見ると、私事にわたるけれども、私の小著のようなものまで架蔵されているのだから驚く。大学構内を案内して頂いた Dr. C.E. Blacker 女史に請われるままに「1966年10月8日ケンブリッジを訪ねて」と署名しておいた。予算については聞きもらしたが、この図書館は、大英博物館、オックスフォード大学図書館とともに、英国国内で出版されるすべての図書の寄贈をうけることになっているというから、その権威のほども察せられるというものである。

次に講義題目については、次のような仕組みになっている。

まず1年次には、Mr. E.B. Ceadel, Dr. C.E. Blacker 両氏の Elementary Japanese が前期にあって、後期には Nihonjin, Nihon no ijin の講義がある。また、Dr.

C.D. Sheldon の Outline of Japanese History や Mr. R. Kaneko の Conversation class などは1年通しの講義となっている。

2年次になると、Mr. E.B. Ceadel の Hōjōki, Text Reading などの講義があり、後期には「方丈記」に代って「古今集」があり、他は学年末まで継続される。また、Dr. C.E. Blacker の Kanzan Jittoku や Yabu no Naka が前期にあり、後期にも継続されるが、後期後半になって、「藪の中」の代りに、「雨月物語」の講義が用意されている。更に、Dr. C.D. Sheldon の Early and medieval Japanese History, Kinsei Shakai の2講義が前期にあるが、後期には Early Modern Japanese History と Modern Japanese History とが講義されることになっている。また、Mr. R. Kaneko の Conversation class は1年間継続となっている。

3年次になると、Mr. E.B. Ceadell の Oimatsu や Dr. C.E. Blacker の Heike monogatari や Fukuō hyakuwa, Jashūmon の講義が前期にあって、後期になると、「福翁百話」の代りに「福翁自伝」が講義される。また、Dr. C.D. Sheldon の Japanese History, special subject が1年間の講義となっている、というぐあいである。これを見ると、やや特殊な講義が行なわれているとの印象をうけるが、全体として、近世から近代への日本の社会変革に特に焦点が置かれているようにも見受けられるのである。

10 コロンビア大学

周知のように、ニューヨークの市中にあるコロンビア大学は、ドイツやイギリス、殊にケンブリッジで大学などとは趣を異にしてい、明るい雰囲気にもちていることを直感するが、構内は近代的な建物が建ち並んでいながらも重厚さを失うことのない、やはりアカデミックな世界である。‘East Asian Institute’ は構内の Kent 館にあってそのスタッフは、リストによると、日本文学関係では、

Donald L. Keene, Professor of Japanese

Hershel F. Webb, Associate professor of Japanese

Yoshito Hakeda, Assistant professor of Chinese and Japanese

Ivan J. Morris, Professor of Japanese

Marleigh Ryan, Assistant professor of Japanese

Ichiro J. Shirato, Assistant professor of Japanese

Herbert Paul Varley, Assistant professor of Japanese History

Umeyo Hirano, Lecturer in Japanese

Roland A. Lange, Lecturer in Japanese Language and Linguistics

Shumpei Okamoto, Lecturer in Japanese

など、更に“Visiting officers”としては、

In Japanese: Professor Hisao Kanaseki of Kobe University

In Japanese History: Professor Arthur E. Tiedemann of the college of the
City of New York

In Japanese Thought: Professor Ryoen Miyamoto of Japan Women's University, Tokyo

In Sociology (Japan): Professor Koya Azumi of New York University

というような方々がおられる。まことに多彩な顔ぶれであり、日本文学の研究もヨーロッパの諸大学にもまして非常に盛んであることが知られる。Morris 教授や、白戸助教授夫人に蔵書の調査や講義内容の質疑をする便宜を与えられたが、図書館でまず一見して直感したことは、地方史が充実していることである。東京市史稿や西宮市史(6巻)その他、また京都叢書や南紀徳川史というような東京でも入手しがたいものが、すべて揃えられている。日本関係の文献は現在約8万冊収蔵されているとのことであるが、私のメモから任意にとり出してみると、次のようなものがある。

日本古典全書(朝日)、日本古典文学大系(岩波)、古典全書、歌謡集成、謡曲大観、漢詩大観、国訳漢文大成、国華(全揃)、雲崗石窟、江戸時代文芸資料、伴信友全集、近世文芸叢書、新百家説林など、また仏教関係では、大日本仏教全書、国訳一切経、南伝大蔵経、大正新修大蔵経、大日本統蔵経というような文献の蔵されているのは、大きな特色といってもよい。更に、大日本史料、史籍集覧、大日本古文書その他の、東大史料編纂所関係の文献がすべて揃えられているのも見事である。また「早稲田文学」の既刊分全揃が収蔵されているのも、私には珍らしく思われたが、国文学関係の雑誌類は、ヨーロッパよりも近い一実にはさほど相違はないと思われるが一せいか、実に豊富である。国文学(学燈社)、国語と国文学、解釈と鑑賞(以上至文堂)などをはじめ、近世文芸、言語と文芸、国学院雑誌、国語国文(京大)、国文学研究(早大)など、国文学科のある主要大学の機関誌、紀要、報告書の類は殆んど届いているし、宮内庁書陵部紀要なども入っていることがわかった。更に羨望を禁じ得なかったのは、日本の大学でもあまり例はないと思うが、日本の国会図書館の日本・中国関係の図書全カードがここにはすべて別置のカードボックスに収められていて、必要に応じて直ちに国会図書館に発注して、ゼロックスやフィルムが入手できる態勢になっているということであった。こうなると、研究上必要とするものはすべて間にあうとい

うことで、その機械的処理の迅速さに驚くのである。

コロンビア大学の日本文学研究が、いかに盛んで積極的であるかということは、“East Asian Studies” の名のもとに出されている「東亜」と銘打った案内書にもよく象徴されていると思うが、講義の充実ぶりによっても充分に伺うことができる。講義題目はあまりにも多いので、すべてをここに記すことはできないが、主なものを掲げ、要点を記してみると次のようになる。

まず “Language Courses” と “History and Culture” とに分かれているが、“Language Courses” には次のようなものがある。

Japanese. Elementary Japanese, Professor Ryan, Mr. Large. A basic training in Japanese reading, writing, and conversation.

Japanese. Intermediate Japanese(second-year level), Mr. Okamoto, Professor Ryan. Further practice in reading, writing, conversation, and grammar.

Japanese. Intensive course in Japanese, Professor Shirato.

Japanese. Contemporary Japanese(third-year level), Professor Shirato, Miss. Hirano. Reading in advanced general and specialized texts, and review and further practice in the bungo (literary Japanese) elements in the modern colloquial language. Textbooks: Uehara, Journalistic Japanese Reader; Yanaihara, Sengo Nihon Shōshi; Hibbett and Itasaka, Modern Japanese.

Japanese. Historical development of Japanese grammar, Mr. Lange.

Japanese. Readings in classical Japanese(fourth-year level), Professor Keene and Kanasaki. A study of important literary and historical texts including Hōjōki, two Nōplays, Okuno Hosomichi, and sections from Heike Monogatari.

Japanese. Reading in Modern Japanese (fourth-year level), Professor Morris. The modern documentary style is emphasized. Textbooks: Kawabata, Yuki-guni; Maruyama, Gendai Seiji no Shiso to Kodo.

Japanese. Kambun, Professor Hakeda. Study of the literary style adapted from classical Chinese.

Japanese. Modern Japanese texts (social and cultural), Professor Hakeda. Designed to prepare students for research in the modern social sciences and humanities. Emphasis on sōrōbun.

というような具合である。1年次から4年次までを見わたすと、現代語から古典語へ、

更に実用的なものから古典作品へというように、当然とはいえ、合理的に段階的に進められていることがわかる。古典では「平家物語」や「方丈記」、更に謡曲や「奥の細道」のような作品の研究、また「雪国」など現代作品の研究にまで及んでいることが知られる。また漢文教育や候文の教育まで行なっているところを見ると、日本の大学生が候文など全く忘れ去ってしまっている現状からすれば、まことに皮肉な現象といわざるを得ない。

“History and Culture”になると、次のような講義題目がある。

Japanese. Japanese literature, Professors Keene and Kanaseki. The development of poetry and prose; the flowering of literature in the Heian period; war-tales, the Nō, linked-verse, and other types of medieval literature. Popular novels, plays, and haiku of the Tokugawa period; Japanese literature under Western influence. Comparisons with developments in China and in the West are made when possible.

History-Japanese. History of Japanese civilization. Professors Morris and Webb. A detailed survey of Japanese history and culture from the beginning of the Tokugawa period.

History-Japanese. History of Modern Japan. Professors Webb and Tiedemann. A detailed survey of Japanese history from middle of nineteenth century to the present time, with particular emphasis on political, social, and intellectual developments.

Japanese. Meiji literature. Professors Keene and Kanaseki. Reading in the prose, poetry, and drama of the Meiji era.

Japanese. Japanese poetry. Miss Hirano. A survey of Japanese poetry.

Japanese. Heian civilization. Professor Morris. Emphasis on the late Heian period, especially the world of the Tale of Genji.

Japanese. Medieval Japan. Professor Varley.

Japanese. Japanese bibliography. Professor Webb.

他は省略に従ったが、書誌学まで入っているというように、多彩な講義題目と多数のスタッフを見ると、これまでヨーロッパでは、ロンドン大学やケンブリッジ大学においても見受けられなかった豊富さである。最初予定していながら日程の都合で訪ねることのできなかった、エール大学の K. D. Butler 助教授から聞いたところによると、1963年、同大学に日本文学部門の開設当時は志望学生はわずかに4人にすぎなか

ったが、65年には26人に増加し、66年度には40人にもなったという。加速度的な学生数の増加は、日本文学に対する一般の関心が次第に高まっていることを意味すると考えられるが、コロンビア大学の講義内容を見ても、ヨーロッパとは格段の差異があるようにも思われる。今後一層の充実が期待されるわけである。

ついで乍ら、ここで一つふれておきたいことがある。私が Morris 教授とともに図書館前の広場を通りかかった折のことである。そこで1人の黒人学生が壇上立って、取り囲んだ四、五十人の学生に対して何かを訴えている場面に出くわした。近づいて聞くことはしなかったが、おそらくベトナムの問題か何かを論じていたのであろうが、彼は決して絶叫していないし、ましてメガホンなどはもちろん持っていなかった。聞いている連中もただ黙々と聞いているだけで、ヤジをとばす者もないし、実に静かな聴衆であった。私は傍の Morris 教授にきいてみた。アメリカの学生はデモはやらないのかと。ところが、Morris 教授の答えはこうであった。アメリカの学生にもデモはもちろんあるが、静かにやっていると。プラカードを持って、静かに構内をねり歩く風景は時折見かけるが、ということであった。日本の学生運動の様相とはおよそかけはなれたものがあるようである。アメリカの学生が、自己の自由を主張するとともに、他の自由を尊重する、この静かなデモこそ本当の個人主義であり、民主主義のあらわれというものではなかろうか、というのが、そのときの私の感慨であった。さきのソルボンヌの学生のように、入ってからのきびしい訓練によって、卒業時には学生数が激減すること、アメリカでは、成績不良の者が徴兵延期の特典を剥奪されるということなど、こうしたことを考えあわせても、大学生はなかなか鍛えられるし、勉強もしないではいられないようである。日本の、特に文科系の学生はあまりにも甘やかされているのではあるまいか、というのが、またその折の私の率直な感想であった。

ハーバード大学

ハーバード大学のあるケンブリッジの町は、ニューヨークからジェット機で約30分のところ、大体東京から名古屋ほどの距離にあるボストンの町と、チャールズ河をへだてて隣りあっている。有名なマサチューセッツ工科大学もここにある。

ハーバード大学には、東洋学の研究所として古くから知られている燕京研究所“Yenching Institute”があり、日本文学の研究も近來とくに盛んになりつつあるように見受けられた。この研究所には例のライシャワー教授の研究室もあり、数年前から板坂元氏がおられ、また昨年国学院大学から派遣された伊藤幹治氏が研究員としておられて、何かと便宜を与えられた。時間の関係で、図書館の内部を詳しく見る機会を

持ち得なかったので、ここでは講義内容についてのみ記すこととする。ここでもコロンビア大学と同様に非常に多くの講義が用意されている。すべてを掲出できないが、その概要を記すと次のごとくである。

“For Undergraduates and Graduates” として、

Intensive Elementary Japanese. Mrs. M.H. Kwok. Introduction to Modern Japanese: pronunciation, grammar, conversation, and the elements of writing system.

Intermediate Japanese. Assistant professor E.A. Cranston.

Intensive Intermediate Japanese. Mrs. M.H. Kwok. Reading of modern texts; conversation and composition. Modern Written Japanese. Assistant professor E.A. Cranston. Reading of Modern Japanese articles and fiction.

Reading in Modern Japanese. Mr. G. Itasaka. Lectures, discussion, and rapid reading on aspects of Modern Japanese culture and society. Conducted in Japanese.

Classical Japanese. Mr. G. Itasaka. Reading of texts in classical Japanese of the Heian and Kamakura Periods.

Classical Japanese. Kambun, and Sōrōbun, Mr. G. Itasaka. Reading of later texts in classical Japanese and introduction to Kambun and Sōrōbun.

Modern Japanese Fiction. Professor H.S. Hibbett. Reading in major Japanese novelists from Meiji period to the present.

Reading in Japanese History. Professor D.H. Shively. Rapid reading of selections from the works of modern Japanese historians.

History of Japanese Literature. Professor H.S. Hibbett. A survey of traditional Japanese literature, before the modern era of western influence.

Modern Japanese Literature. Professor H.S. Hibbett. Japanese literature from Meiji Restoration to the present, with emphasis on the major novelists.

などである。また “Primarily for Graduates” としては、

Materials and Methods of Japanese Studies. Professor D.H. Shively. A pro-seminar dealing with the bibliography and techniques of research in Japanese studies.

Nara and Heian Court Literature. Assistant professor E.A. Cranston. Poetry from the Manyōshū and later anthologies, and selections from major works

of Heian Prose. Readings in Tokugawa Thought. Mr. G. Itasaka. Selections from Arai Hakuseki, Ogyū Sorai, Motoori Norinaga, and others.

というような専門的な講義が行なわれている。更に“Graduate Courses of Reading and Research”としては、

Reading and Research. Professor H.S. Hibbett, D.H. Shively, Assistant professor E.A. Cranston and Mr. G. Itasaka.

その他の講義が行なわれている。

一見してわかるように、日本の大学の国文学科のそれにもまして、充実した専門的な教育が行なわれているといっよい。板坂氏によれば、日本でのように、教授が他の大学を兼務している例は稀であるとのことだが、それは当然のこととして、ともかく教授も学生も他に力をさくことなく、充実した研究を行なうことができるということは、われわれとしても大いに反省する必要があるだろう。夜になってからのことであるが、私は伊藤氏とともに夜半近いころハーバード大学の構内を通ると、10階ほどのビルの最上階の部屋にはまだ煌々とあかりがついていた。伊藤氏はそれを指さして、あれはまだやっているのですよと、やや感慨深げに私に語りかけられたことを今にして思い出す。日本文学の研究も、日本におけるよりも海外において、より成果があがるというようなことが遠からず到来するようなことがあれば、われわれの怠慢これにまさるものはない。インド学、シナ学にその先蹤がある。インド学やシナ学が、既に本国におけるよりも、ヨーロッパにおける研究の成果を度外視しては如何ともならないという現状を知るならば、われわれは決して安逸をむさぼっていることを許されないはずである。

一応大学に関してはこれで終ることにして、最後に一つ、ボストン美術館のことについてふれておきたい。ここは世界有数のコレクションで知られているだけに、日本の国宝級のものがずらりと揃っていて、その収蔵品は圧倒的である。「平治物語絵巻」をはじめとして「吉備大臣絵巻」や、光琳・宗達の作品、珍らしいところでは徽宗皇帝の美人画など、非常に貴重なものが収蔵されている。「吉備大臣絵巻」は50,000ドル(邦価約1,800万円)で購入したものであるという。版画浮世絵は6万点、肉筆のものでも300点に及ぶということであり、屏風もおよそ300点はあろうという。日本の文化的遺産が海外でかくも多数保存されているということは、これらが最良の条件のもとで永久に伝えられるという点ではむしろ喜ぶべきことであるかもしれないが、こうした流出は、やはり何としても憂うべきことであり、さびしい限りであることもまた事実である。

12 カリフォルニア大学

カリフォルニア大学は、ヨーロッパの大学や、アメリカでも東部の大学などとはおよそ異なって、構内には明かるいのびやかな空気がみちみちていることが直感される。広大な構内を歩くと、日本では見かけることのない南国的な樹々が高く聳え、その間から澄みきった碧空がのぞいて強烈な光がまぶしい。この大学は正式には“California University of Los Angeles”といい、略語では U. C. L. A. (University of California Los Angeles) という。もともとパークレーのカリフォルニア大学のロスアンゼルス分校として設立されたものであるが、近年独立して州立の総合大学となったものである。

図書館を訪ね、“Orientat Library”に入ると、ここも一見して豊富なコレクションであることをまず感ずる。日本及び中国関係の蔵書は約16万冊あって、特に仏教、歴史、美術関係書の多いのが特色で、次いで文学関係に力が入れているとのことである。年額予算は10,000ドル（約360万円）で、その他当地の仏教界から500ドルの寄附があるという。適宜とりあげてみても、桂宮本叢書、日本古典全書（朝日）、日本古典文学大系（岩波）、俳諧叢書（博文館）、洒落本大系、大辞典、大漢和辞典、国歌大観、国宝、国華、正倉院御物などから、西藏大蔵経、復古記、加賀藩史料、京都叢書、帝国文庫、有朋堂文庫、大南北全集、近松全集、漢文大成、雲崗石窟、その他が蔵され、雑誌類も「国語と国文学」の他、殆んどのものが揃えられている。更に、貴重書としては「新西域記」（大谷家蔵版）があり、これは日本では見かけることができないものではないか、とのことであった。「中央公論」が創刊号からすべて揃えられていることも珍らしい。

次に講義内容についてその概要を述べることにする。

Spoken Japanese, Takahashi,

Elementary Modern Japanese, Takahashi, Ueno, Okuda, Yanagi.

Advanced Spoken Japanese, Lange.

Intermediate Modern Japanese, Takahashi.

Classical Japanese and Kambun, Befu.

Japanese Literature in Translation, Befu.

Reading in Japanese, Befu.

Seminar in Japanese Literature, The Staff.

Seminar in Buddhist Studies, Ashikaga.

コロンビアやハーバードに比べて、やや物足りないが、これらを通観して感ずるのは、特に語学としての日本語に力が注がれているということである。とりもなおさずそれは、他には見られないこの大学の特色の一つといってもよいであろう。

以上ながきにわたって、海外における日本文学研究の現状について、その概要を述べてきたわけであるが、いまふりかえてみると、資料を生のままで羅列した憶がないでもない。しかしこれは、いささか言いのがれめいて気がとがめるけれども、冒頭にもおことわりしたように、レポートとしての性格上やむを得ないものがあるということをし添えて、お許し願いたいと思う。

なお、このたびの海外出張について御配慮をたまわった野口尚一学長をはじめ大学当局の方々に対して、ここに改めて深甚の謝意を表するとともに、ソ連関係の資料を提供して下さった今井義雄氏および種々の助言をいただいた大学内の各氏に対しても、併せてここに御礼申しあげたい。

(本学教授・日本文学)